

信仰の鍛錬

テモテ I 4章6～16節

2023年11月19日

松田 基子 師

今日社会問題になっています、宗教二世と呼ばれている人々の苦しみに心が痛みます。親達が間違った教えに呑み込まれて行った結果が、子供達を苦しめてきました。キリスト教の歴史にも間違った教え、異端は入り込んできました。異端の定義は、**公に定められた信仰の教理を否定する事**だとされています。キリスト教信仰の教理は、旧新約66巻を聖書正典として、全て聖書から導き出されています。ここで注意すべきことは、異端も聖書を使用することです。

しかし、それは自分達の都合に合わせた聖書解釈をしています。異端に誘われた人々は、聖書の言葉だからと信用してしまいます。テモテ II の手紙の3章16節に、

「**聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です**」

と記されています。大切な事は、聖書は聖霊の導きの下に書かれた物ですから、また、この真理を悟り、それが自分にとって命の言葉となるためには、聖霊の助けを求めることが必須の事なのです。そして、聖書はその時代、時代に生きた人々が、神様と、どう関わったのか、その生活の座から語られています。ですから、その背景を知ると共に、**書かれた目的とそこに表された神の愛、キリストの愛を知る事が求められています。**

全てイエス・キリストの十字架の贖いと言う、その濾過紙を通して理解しなければなりません。

異端かどうかはそこで判別します。今日、私たちにとって、旧・新約が揃った正典としての聖書が自分の手にあると言う事は、神様からの大きな恵です。聖書をもっともっと愛し、親しんでいくな**ら、聖書から汲めども尽きぬ祝福を得ることができます。**

さて、今朝の聖書箇所はテモテ I の手紙4章です。ここにも異端との戦いが記されています。テモテ I の手紙は、使徒パウロからテモテに書き送られたものですが、紀元63年～64年の事だと推定されています。当時の聖書と呼ばれていたものは旧約聖書でした。新約聖書はまだ、聖書として定まってはいませんでした。それぞれ文書として、教会に回覧されていました。正典と言う意味は、正しい物指しと言う意味です。正しい物指しがあれば、

『これは合っている、これは間違っている』と判断する事ができます。しかし、正しい物指しがいなければ、色々な主張が出て来ます。初代教会に於いて様々な考えが、キリスト信仰を揺さぶったのはそのためです。

異端が横行しました。当時、教えを説いて歩く、巡回教師達がいました。パウロは、

『偽教師に警戒するように』
と言っています。テモテはパウロの命に依ってエフェソ教会に遣わされていました。エフェソ教会にも異端が入り込んでいました。

1章3節を見ますと、

「**異なる教えを説いたり、作り話や切りのない系図が議論されていました。**」

4章3節では、

「**結婚を禁じたり、ある種の食物を断つことを主張する人々がいました。**」

パウロはその間違いを正し、教会を健全な信仰に導くために、テモテをエフェソ教会に送ったのですが、テモテの事が案じられて、牧会の務めを如何に果たして行くべきかを手紙に記したのです。

テモテは全腹の信頼を寄せているパウロの指示に従いたいという思いでいっぱいでした。テモテはパウロに従ってから十数年、パウロを父の様に慕い、パウロもまたテモテを

「愛する子」

と呼ぶほどに信頼し合い、共に福音宣教にあたってきました。テモテは真面目で、誠実で、命じられた事に、とても忠実でしたが、性格は控え目で内向的であった様です。相手の間違いを正面から、

『それは間違っています』と、堂々と言っていくのは苦手だったようです。間違った教えを説く人達と言うのは、声も大きく、人々の注目を集めるように振る舞います。おとなしい性格の人にとって、そう言う人は苦手です。

「早く行ってしまっていて欲しい。彼らが行ってしまった後で、

『あれは間違いですよ』

と、教えてやろう。」

と、逃げ腰になってしまいます。しかし、そんなテモテを知るパウロは、

「ここで退いてはならない。聖霊の力と助けを確信して、言うべき事は言いなさい」

と励ましているのです。

6節の訳は、新改訳によりますと、

「これらの事を兄弟達に教えるなら、あなたは、キリスト・イエスの立派な奉仕者になります。

信仰の言葉とあなたが従って来た良い教えの言葉によって、養われているからです」

とあります。

テモテは、信仰深い母、祖母の許で幼い時から、旧約聖書に親しみ、その心には沢山の御言葉が蓄えられて来たのですが、自分から積極的に行動すると言う事は苦手だったようです。伝道もいつもパウロに従ってパウロに依り掛かって来ました。パウロと一緒に居れば、驚くべき道が次々に開かれました。パウロと一緒に居さえすれば安心でした。パウロはそんなテモテを独り立ちの信仰に押し出して、

「私が共にいなくても、あなたは十分に成長したのだから大丈夫。踏み出しなさい」と勇気づけているのです。

パウロの願いは、愛するテモテが愈々(いよいよ)霊的に成長することでした。そこで、7節に、

「信心のために、自分を鍛えなさい」

と、命じています。岩波訳では、

「敬虔の方向に、自分自身を鍛錬しなさい」

と訳されています。敬虔(けいけん)という意味は、

『人の力の及ばない人間を越えた存在

である神的存在への畏敬の念であり、

厳粛な想いのこと』

と説明されています。7節の信心とは、

『敬虔な信仰』

のことです。神様の前に遜り(へりくだり)、全信頼して愈々神様に従って行くことです。

ところで、どうして間違った信仰であるかどうか、識別出来ないのでしょうか。それは心遜り、心聖められて聖霊の働きによって、イエス様と結ばれていないので、

『ああでもない～こうでもない』

と結局、自分の判断に頼ってしまうからです。私達もなかなかそこに辿り着けないままの信仰生活をこの世の判断で送っているのではないのでしょうか。 どうしたら良いのでしょうか。

パウロは、

「それは決して簡単に手に入る物ではない」と言っています。パウロやテモテが生きていた時代、スポーツが盛んでした。都市には競技場がありました。競技場では様々な競技が行われました。走競技、レスリング、ボクシング、投げ槍、円盤投げ、戦車競争など、多くのスポーツが行われていたようです。

パウロは、その彼らの厳しい訓練ぶりを思い浮かべています。彼らはこの地上での栄冠を得るために全力を尽くして、訓練に訓練を重ねています。パウロは、彼らが大変な努力をしているのに、8節を見ますと、

「体の鍛錬も**多少は役に立ちます**」
と言っています。

必死に訓練している人から言わせれば、
「価値が分からない者だ」
と非難されるでしょう。パウロは何故そんな言い方をしたのでしょうか。

『それはこの地上の賞賛を得る為のものであって、**必ず消えてなくなって行く**』
からです。地上においては、価値があるので、
「多少は役立ちます」
と言って、決して肉体の鍛錬を否定しているではありません。パウロが求めている事は、信心、即ち、**イエス・キリストへの敬虔な信仰の鍛錬**です。パウロは肉体の鍛錬に比べて、敬虔な信仰の鍛錬は、**この世と、来るべき世で**

の**命を約束する**ので、

「全ての点で益となるからです」
と言っています。

肉体の鍛錬は、この地上の肉体を宿として、それも健康な時だけです。しかし、敬虔な信仰の鍛錬は、この地上での救いの確信ばかりでなく、来るべき世、即ち、永遠の命を得て、神の国に住まう約束が与えられています。

肉体の鍛錬と、敬虔な信仰の鍛錬は、同じ鍛錬でも比較になりません。しかし、私達は信仰の鍛錬に、どれ程の価値を置いて、信仰の鍛錬を求めているのでしょうか。信仰の鍛錬とは、どうすることでしょうか。

毎日聖書を読んで、お祈りをして、良い行いに励む事なののでしょうか。ヘブライ人への手紙、11章1節に、信仰の定義が記されています。

「**信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです**」
とあります。それはつまり、

『**信じて、賭けて、従って行った先に、約束の物が得られます**』

と、言う事です。目の前に実態はないのです。しかし、

『**約束して下さった方に、絶対的な信頼をおいて、それに向かって進む**』
と言うことです。

人間的な常識で考えたなら、神様は目に見えません。イエス・キリストは確かに十字架に架かり、死なれました。しかし、復活は信じられない。まして、イエス・キリストを信じて、罪が赦され、永遠の命が与えられる。キリストは世を裁くために再臨される。キリストと共に神の国に永遠に

住む者となる。これらの事は人間の考えでは、信じ難いことです。パウロの伝道チームで共にキリストを信じて、心燃やされて伝道した人にデマスと言う人がいました。ところが、彼はテモテの手紙Ⅱの4章10節で、

「デマスは、この世を愛し、わたしを見捨ててテサロニケに行った」

と記されています。

イスカリオテのユダもそうでした。彼らは目に見ることの出来ない神様の約束、イエス・キリストの約束が信じられなかったのです。

「この世を愛した」

と言うのは、信じる故に、必ず負わされる十字架を負うことに、価値を見出す事が出来なかったのです。信仰の鍛錬は、神様の約束、イエス・キリストの約束を信じ続ける、心の強靭さを持つことです。それは決して思い込みやマインドコントロールに依るものではありません。パウロは10節で、

「わたしたちが労苦し、奮闘するのは、すべての人、特に信じる人々の救い主である生ける神に希望を置いているからです」

と言っています。

私達が信じている神様は、人間が考え出した神ではありません。人間を創造された、生きて働いておられる神様です。

モーセに、出エジプト記3章12節で、

「私は必ずあなたと共にいる。」

この事こそ、

「わたしがあなたを遣わすしるしである」

と言われ、神様に従う人々に、

「共にいる」

と、励まし、助けられた神様です。神様は

詩編の50篇15節で、

「わたしを呼ぶが良い。苦難の日、わたしはお前を救おう」

と約束しておられます。イエス・キリストも復活して、永遠の世界に帰られる時、マタイ福音書28章20節で、

「わたしは世のおわりまで、いつもあなたがたと共にいる」

と、約束して下さいました。また、その意味をヨハネ福音書の14章26節で、

「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」

と言われました。

ですから、今日の私達は聖霊を求め、聖霊の働きに依って生ける神様、生けるイエス・キリストに出会い、御言葉を通して、御心を示して頂けるのです。私達が祈るとき、聖霊はすでに働いて下さっていますが、神様の御心を求めて行く為には、自分の考えでいっぱいな心を、神様の前に遡り、自分の思い、考えを追い出して、

『ご聖霊、私の心を聖め、私を支配し、御心を示して下さい』

と、心から祈って行かなければなりません。私達は祈りをしていながら、何と自分の願いごとばかりを並べたてて、

「では神様宜しくお願いします」

と言うと、神様の御心を聴こうとはしないで、さっさと祈りを切り上げているのではないのでしょうか。

それでは全く信仰の鍛錬にはなっていません。そうすると、パウロはテモテに、12節で、

「あなたは、年が若いということで、
だれからも軽んじられてはなりません。
むしろ、言葉、行動、愛、信仰、純潔の
点で、信じる人々の模範となりなさい」

と命じているので、

『ああ・・・、こう言うことに努める事が
信仰の鍛錬なのだ・・・』

と思われるかも知れません。しかし、そう言う
事を自分の努力でしようとするなら、必ず**律法
主義に陥って**しまいます。聖霊を求め、聖霊
に明け渡し、**聖霊の導きと、助けに結ばれる時**、
それらの事は**聖霊が教え、導いて**下さいます。

敬虔な信仰の鍛錬とは、
『如何に自分を空しくして、**聖霊の支配の
下に御心に聴き従って行くか**』

の訓練です。聖霊は自我が明け渡せない私
達を辛抱強く、何度でも導き、何度失敗しても助
け導いて下さいます。パウロは信徒さん
達も、この様に聖霊に導かれて、信仰の鍛錬
がなされて行くように、

『テモテに聖書の朗読と、勧めと教えに
専念しなさい』

と命じています。

私達は今日、テモテの時代とは違って、自分
の聖書が自由に持てる時代です。神の靈感に
依って書かれた聖書を、聖霊の導きと教えを求
めて読む時、それが命の言葉となって私達の
心に刻まれ、その御言葉に促され、キリストに
従って十字架を負っていく事が出来る者に、
変えられて行くのです。

パウロの願いは、イエス・キリストがテモテを
選んで、伝道者の業をなすように、その賜物を

与えて、長老達の按手を受けさせられた、その
恵の大きさを見失う事なく伝道者の業に励んで
くれる事でした。

そしてテモテが勧めに従って生きる事により、
「あなたは自分自身と、あなたの言を
聴く人々とを救うことになります」

とのパウロの言葉に確信を得て、信徒さん共々、
天の御国、永遠の命への道を歩むことを心から
願ったのでした。私達も共に、この一筋の道を
歩き続けて行けるように、日々神様の前に**遜り、
聖霊の支配と導きを心から願**いましょう。

そして聖霊による**信仰の鍛錬**を受け、信仰の足
腰を強めていただき、イエス様の御足の跡に
従って、御国への道を歩み続けて参りましょう。

お祈りをいたします

恵深い天の父なる神様

あなた様は私達に、ご自身の御心に聴き
従って、永遠の命に至るよう、ご聖霊を送り、
聖書をお与えになりました。

しかし、私達は何と自分勝手な信仰に、
生きている事でしょうか。お赦し下さい。
どうかご聖霊のご支配を、心から求め、信仰の
鍛錬を厭わず御心に聴き従い、イエス・キリスト
の御足の後に従い、御国を目指して歩む者とな
らせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りをいたします。

アーメン。